

『三国志通俗演義』・『三国演義』・『三国志』の  
比較を通してみえる「甘寧」

森 村 森 鳳

はじめに

『三国志通俗演義』は、小説家羅貫中が晋の時代の歴史学者陳寿が著した正史『三国志』を元に著した歴史小説である。正史を元に、正史・『三国志』（宋裴松之注）を含む<sup>①</sup>のみならず、正史・『三国志』以後の『後漢書』、『資治通鑑』などの歴史書、および民間伝承を参考にし、創作した歴史小説である。最初の「嘉靖本」に「晋平陽侯陳寿史伝、後学羅貫中編次<sup>②</sup>」という署名を付けている。これにより、作者羅貫中は、陳寿の後学という立場を示し、陳寿の歴史観と人物評価を受け継ぐ態度を表明している。そのため、誠実な歴史学者陳寿が伝えた歴史の真実

が『通俗三国志演義』の中で芸術的な表現として息づいていていいる。

作品が世に出されて以来、大量に刻印され、広く伝えられて、さまざまな版本が作られた。その中で、現存する最古とされる版本、『三国志通俗演義』は「嘉靖本」(「嘉靖壬午年本三国志通俗演義」と呼ばれる)であり、それは原作、あるいは原作に最も近いものだとされている。

嘉靖壬午本的『三国志通俗演義』也許竟是羅氏此書的第一刻本。

嘉靖壬午の本の『三国志通俗演義』はまたばかり、ついにこれ羅氏のこの書の第一の刻本ならん<sup>③</sup>。

許多刊本必定是都出於一個来源、都是以嘉靖本為底本的。

許多の刊本は必ず定んで、これ、すべて一個の来源により出づ。すべてこれ嘉靖本を以て底本とするものなり<sup>④</sup>。

そして、數多くの版本の中で、最も流行し、現在採用されているのは、清の康熙年間に毛綸・毛宗崗親子が加工・潤色した、「毛本『三国志演義』」である。それは清代より『三国志演義』、『三国演義』などと呼ばれ、新中国成立後は『三国演義』に統一された。現在の中国では全て『三国演義』と呼称されている<sup>⑤</sup>。本稿も「毛本『三国志演義』」を『三国演義』にする。

『三国演義』と『三国志通俗演義』の比較について次の見解がある。

毛綸氏父子確是把『三国演義』改得好。從某種意義上說是參加了『三国演義』的創作。沒有毛綸氏父子的精心修改、『三国演義』在藝術上就不可能達到今天這樣的水平。

毛綸氏父子は確に『三国演義』をよく改造した。ある種の意義上でいえば、『三国演義』的創作に参加したとも考えられる。毛綸氏父子の念入りな改造がなければ、『三国演義』は藝術上で今日のようなレベルに達するわけがない。<sup>(1)</sup>

毛氏父子的改作意図與羅貫中的創作思想是迥然有别的。毛氏父子对旧本遍加改竄的結果、(中略)使某些情節的發展不合乎情理、特別是在主導思想傾向上歪曲了羅貫中的原意。

毛氏父子の改作意図は羅貫中の創作思想とはるかにはなれている。毛氏父子は旧本に対して、遍く改竄を加えた結果、(中略)とどこどこに、不条理な部分が生じてくる。特に主導的な思想傾向上で羅貫中の本意を歪曲した。<sup>(2)</sup>

與「毛本」相比、「嘉靖壬午年本三国志通俗演義」(中略)较好地保存了羅貫中本人的思想傾向。

「毛本」と比較してみれば、「嘉靖壬午年本三国志通俗演義」(中略)は比較的によく羅貫中の本人の思想傾

向を保った。<sup>(9)</sup>

以上の見解を踏まえて、毛本『三国演義』は『三国志通俗演義』を芸術的に加工し潤色した故、より人々に感動を与える作品になり、定着した版本になっているが、加工されていない『通俗三国志演義』の方がより羅貫中、また陳寿の歴史観に符合すると考えられる。

そして、羅貫中が創作した歴史小説は、芸術表現を以て、歴史の真実を伝えていることは先行研究に明らかにされていることである。例えば、次のような指摘がある。

『三国志通俗演義』則是基本符合史実而以虛構情節緣飾的。其虛構已具有藝術的真実。(中略) 因此在歷史小說中、不失成功的大書。

『三国志通俗演義』はすなわちこれは基本的に史実符合し、虚構の情節を以て縁飾とするのである。その虚構はすでに芸術的な真実を具有する。(中略) その故は、これが歴史小説において、成功の大書だとは言わざるを得ないことによる。<sup>(10)</sup>

以上の先行研究を踏まえて、「歴史の真実と芸術の統一」という視点から、本稿では正史『三国志』・毛本『三国演義』と比較しながら、『三国志通俗演義』をテキストにして、その中の登場人物甘寧について論を展開していき

たいと思う。

三国志に関する研究は、中国でも日本でも膨大に存在しているが甘寧についてはほとんどない。<sup>(1)</sup> 中国における『三国志通俗演義』・『三国演義』における登場人物についての研究は、次のような指摘がある。

『文化大革命』以前、對於人物形象的研究僅限於曹操、諸葛亮、劉備、関羽等少数人物。(中略) 新时期以来、這一方面的研究有了很大進展。主要表现在…一、研究範圍有所擴大。而且對過去很少研究甚至無人涉及的人物、如魏延、趙雲、龐統、劉表、司馬懿、孫堅、孫權、周瑜、魯肅、陸遜、孫夫人、貂蟬、呂布、劉表等、也出現了各具新意的論文。

『文化大革命』以前に人物像についての研究は曹操、諸葛亮、劉備、関羽等の少数人物に限るのみである。(中略) 新しい時代になってから、この方面の研究は大きく進展してきた。主に研究の範囲の拡大においてである。特に過去に研究が少ない、さらに全く言及されていない人物、例えば、魏延、趙雲、龐統、劉表、司馬懿、孫堅、孫權、周瑜、魯肅、陸遜、孫夫人、貂蟬、呂布、劉表などについても、それぞれ新しい発想を示す論文も現れている。<sup>(2)</sup>

ここでいわゆる「新时期」とは、鄧小平時代以降の時代を意味する。つまり改革開放という経済的な開放に伴う思想解放の時代である。時代の変化の中で、文学研究も、政治的な拘束から解放され、『三国演義』の人物形象に

ついでの研究も大きく発展し、以前、全く言及されていなかった人物についての研究も進んでいるというのである。しかし、それであっても以上の先行研究にあげられた例の中にも、甘寧についての研究が見えない。それはなぜである。それについての研究は今後の課題にもなるが、その理由の一つは、甘寧が抱えている葛藤の難しさ、矛盾の複雑さにより、既成の価値観、人物評価の基準でとらえにくいところにあるのだと思う。それは、本論を通してその一斑が見えてくるであろう。そういう意味で、本論は、今までの研究の空白を埋める試みにもなる。

『三国志通俗演義』作品の登場人物たちは、皆現実の大地に足をつけて、矛盾に満ちた人生の葛藤の中をもがきながら生きている者たちである。

『三国志通俗演義』に描かれたのは、一八四年から二八〇年に至るまでの三国興亡の歴史であり、この間、約百年におこった歴史的事件がリアルに描かれている。

作品の中で、戦乱の時代に、より理想的な社会を求めようと大志を抱え、目標に向けて弛まぬ努力をした英雄たちの人生ドラマが繰り広げられている。脇役たちもまたしかり。甘寧はその脇役の一人典型的な人物である。

## 一 江賊と変身

『三国志通俗演義』で、甘寧についての紹介は呂蒙が孫権に語るセリフによって次のよう語られる。

「某姓甘、名寧、字興霸、乃巴郡臨江人也」。頗通書史。寧爲吏、舉計掾、補蜀郡丞、頃之、棄官歸家。少  
有氣力、好游俠、招合輕薄少年、爲之渠帥、聚衆相隨、挾持弓弩、身披重鎧、腰帶銅鈴、縱橫於江湖之中。人  
聽鈴聲、尽皆避之。乃聚英雄勇士八百余人作事、往來江中、劫掠下任官吏。更以蜀錦作帆幔、左右人皆披錦繡、  
時人稱爲「錦帆賊」。所到之所、如不接待、即放火殺人。若與交歡、則誓不相害。其後悔却前非、改過自新。

「それがし姓は甘、名は寧なり。字は興霸なり。すなわち巴郡臨江の人なり」。頗る書史に通ず。寧は吏と  
爲り、計掾を挙げ、蜀の郡丞を補く。しばらくして、官を棄て家に歸る。少くして、氣力有り、游俠を好む。  
輕薄少年を招合して、かの渠帥と爲る。聚衆相隨う。弓弩を挾持し、身に重鎧を披る。腰に銅鈴を帶び、江湖  
之中に縱横す。人、鈴の聲を聴き、ことごとくみなこれを避く。すなわち英雄勇士八百余人を聚め事を作す。  
江中に往來し、下任の官吏を劫掠す。更に蜀の錦を以て帆幔を作す。左右の人、皆錦繡を披る。時の人称して  
「錦帆賊」となす。所到のところ、もし接待せずば、即ち火を放ち人を殺す。もしともに交歡すれば、すなわ  
ち、あい害せずと誓う。その後、前非を悔い却て、過を改めて自新す。『三国志通俗演義』<sup>13</sup>」

甘寧の前半生については正史に次のように記されている。

甘寧字興霸、巴郡臨江人也。少有氣力、好游俠、招合輕薄少年、爲之渠帥；羣衆相隨、挾持弓弩、負毘帶鈴、  
民間鈴聲、卽知是寧。人與相逢、及屬城長吏、接待隆厚者、乃與交歡；不爾、卽放所將奪其資貨、於長吏界中

有所賊害、作其發負、至二十餘年。止不攻劫、頗讀諸子。乃往依劉表、因居南陽。

甘寧、字は興霸、巴郡臨江の人なり。少くして氣力有り、游侠を好む。輕薄少年を招合して、この渠帥と爲る。羣聚相隨う。弓弩を挾持し、眊を負ひ鈴を帶ぶ。民、鈴の聲を聞て、即ち、これ寧なるを知る。人と相逢し、屬城の長吏に及び、接待の隆厚の者は、乃ちともに歡を交う。しからざれば、乃ち將る所(者)を放ちて、その資貨を奪う。長吏界中に賊害する所有り、その發負を作す。二十餘年に至り、止みて攻劫せず、頗る諸子を讀む。すなわち往きて、劉表に依る。よりて南陽に居す。

注(原作)

吳書曰：寧本南陽人。其先客於巴蜀。寧為吏掾計掾、補蜀郡丞、頃之、棄官歸家。

吳書曰く。寧、本は南陽人なり。その先は巴蜀に客たり。寧は吏と為り、計掾を挙げ、蜀の郡丞を補く。しばらくして、官を棄て家に歸る。

吳書曰：寧輕俠殺人、藏舍亡命、聞於郡中。其出入、步則陳車騎、水則連輕舟、侍從被文繡、所如光道路、住止常以繒錦雜舟、去或割棄、以示奢也。

吳書曰く。寧、輕俠に人を殺し、亡命を藏舍す。郡中に聞ゆ。その出入、歩にはすなわち、車騎を陳べ、水にはすなわち輕舟を連ぬ。侍從、文繡を被る。所に道路を光す如し。住止するに、常に繒錦を以て舟を維ぎ、去るに、或は、割棄して、以て奢を示すなり。「藏舍亡命」は、「亡命を藏舍す」と「舍を藏い、命を亡し」という二通りの訓讀が可能である。<sup>1)</sup>



呉書曰：寧將僮客八百人就劉表。表儒人、不習軍事。

呉書曰く。寧は僮客八百人を將いて劉表に就く。表、儒人なり、軍事を習せず。<sup>(15)</sup><sup>(16)</sup>

以上の引用に見られる通り、『三国志通俗演義』における甘寧の描写は、ほぼ史書と一致している。「錦帆賊」の「錦」という言葉は、略奪によって得た贅沢さを極めた生活を示している。彼の前半生の本業を「江賊」と定義付けている。「殺人放火」（「放火殺人」という言葉は、『三国演義』では省略された）という言葉は、史書に記されている「軽俠殺人」、「藏舍亡命」という史実を忠実に伝え、甘寧の悪行ぶりを示す。「人、鈴の聲を聴き、ことごとくみなこれを避く」という描写は、人々の反応によって彼とその一行の悪行の恐ろしさを反射的に表している。

それは、『三国演義』における甘寧の変身の下りにもある。次のような呂蒙が孫権に甘寧を紹介する言葉がある。

寧字興霸、巴郡臨江人也；頗通書史、有氣力、好游俠；嘗招合亡命、縱橫於江湖之中；腰懸銅鈴、人聞鈴聲、尽皆避之。又嘗西川錦作帆幔、時人皆稱為「錦帆賊」。後悔前非、改行從善…。

寧、字は興霸、巴郡臨江の人なり。頗る書史に通じ、氣力有り。游俠を好む。嘗て亡命を招合し、江湖の中に縱横にす。腰に銅鈴を懸け、人、鈴聲を聞き、ことごとく皆、これを避く。また、かつて西川の錦にて帆幔を作す。時の人、皆、稱して「錦帆賊」と為す。後に前非を悔い、行を改め、善に従ふ…。<sup>(17)</sup>

この中で、「頗通書史。寧為吏、挙計掾、補蜀郡丞、頃之、棄官帰家」という甘寧の変身を「後悔前非、改行從善」（後に前非を悔い、行を改め、善に従ふ）と、「改惡從善（惡を改めて善に従う）」という一人の江賊のシンプルな変身譚に簡略化した。これによって甘寧が変身する過程は次のように受け止められている。

後に學問に志し、それまでの行いを改めて劉表に身を寄せた。<sup>(18)</sup>

そんな生活を二十年続けた後、これまでの生活を一転させて書物に没頭し、やがて荊州の劉表に仕えた。<sup>(19)</sup>

つまり、甘寧の変身の過程は、江賊の悪行を止め、読書を始め、文武両道に励み、まともな道を歩もうと劉表に身を寄せたという軌跡になる。

しかし、この過程は、『通俗三国志演義』においては、「頗る書史に通じ。寧、吏と為り、計掾を挙げ、蜀の郡丞を補く。しばらくして、官を棄て家に帰す。少くして、氣力有り。游俠を好む。輕薄少年を招合して、かの渠帥と爲る。」と、「頗る書史に通じ」ということを甘寧が江賊になる前のこととしてはっきり示している。これは、史書『三国志』の「寧、吏と為り、計掾を挙げ、蜀の郡丞を補く」という注の内容を根拠にしたと考えられる。甘寧は蜀の郡丞を補佐する「計掾」という役を務めた体験がある。「計掾」という猷策などの補佐役により、江賊になる前にすでに書史に通じていたという意味合いである。

このような『三国志通俗演義』の時間の順序に沿って読めば、甘寧の変身に必然性があると読み取れる。それを手掛かりに、社会的な背景から甘寧が役人から江賊、江賊から武將へと変身する歴史の必然性を探ってみたい。

正史の「その發負を作す。二十餘年に至り」という時間から計算すれば、江賊に終止符を打った時期がちょうど赤壁の戦いの直前、二〇八年に当たるといえる。時代は、大きな転換期を迎えている。二十年前に、甘寧が官を棄てて家に帰った年頃、支配者の腐敗は極まり、四〇〇年も続いた漢王朝は衰退の道をたどった。一八四年、黄巾の乱が勃発。一八五年、十常仕（宦官）が列侯となり、宦官が権力の頂点に登り詰めた。文化的な教養を欠いた宦官たちは、道徳や法律のおきてを無視し、権力欲、金銭欲に動かされ、政治を混乱させていた。そうした時代の状況下で、役人は濁流に身を任せ自らを汚すか、濁流に抗い自滅するかという二者択一を強いられていた。そのとき、自らの清廉と命を保ち、官界から身を引き、隱遁生活を送りながら待機していくというのは、多数の大志を抱える良心的な文人の選択するところとなった。

こういう風潮の中で甘寧がとった「官を棄てて家に帰る」という行動も、同質なことだとも言える。ただし、気力や機略が過剰である甘寧は、長閑な隱遁生活に甘んじることができなかったであろう。江賊の頭領になることは、彼が選んだ、自らの性格にふさわしい「隱遁・待機」の道だったかもしれない。

## 二 立身出世の道入

『三国志通俗演義』は中国で最初の歴史演義小説である。その後、「演義」という言葉は、歴史上の事実を潤色して、通俗的に描いた「章回小説（回数を分けて記述する文体の伝統的な長編小説）」という意味合いを持つようになったが、以前、つまり言葉の本来の意味は、義理を闡発するというものである。それ故、『通俗三国志演義』いうタイトルは、『三国志』に含まれる大義を通俗的な言語で闡発するという意味合いを持っている。では、この小説が闡発しようとする大義とはなにか。それは、中国人の民族心理に深く浸透している儒教の精神であり、具体的にいえば、「仁・義・礼・智・信」という道德観（修身）と「齊家・治国・平天下」（志）という立身出世の志・積極的な進取精神である。そのため、作品に登場する英雄たちはそれぞれ異なる集団に所属し、強い個性を持っているが、共通の道德の規準を守り、共通の理想を目指している。つまり、『通俗三国志演義』に描かれているのは、忠義を道德の規準にして、大志を抱き、積極的に進取する英雄の群像だといえよう。こういう意味で甘寧も英雄の群像の中で最も鮮烈な個性を持った典型的な人物の一人である。

このような時代背景において見れば、甘寧の再出發は、ただ悪行を捨て、真面目な道を歩み始める江賊の変身譚ではなく、大志を抱え、出世の機を狙って隠遁している英雄が、時代の機に応じて歴史の表舞台へ登場した物語だと言えよう。それは甘寧が孫權に会って最初に語った言葉にも窺える。

今漢祚日危、曹操弥驕、終為篡盜。南荆之地、山陵形便、江川流通、誠是国之西勢也。寧已觀劉表、慮既不遠。兒子又劣、非能承業伝基者也。至尊当早図之、不可後於操；若弛緩、則操必図之矣。

今、漢祚は日に危く、曹操いよいよ驕りて、ついに篡盜をなさん。南荆の地は、山陵、形便なり。江川、流通なり。誠にこれ国の西勢なり。寧、已に劉表を觀て、既に遠からざるを慮う。兒子、また劣なり。能く業を承け基を伝ふる者にあらざるなり。至尊、当に早くこれを図るべし。操に後るべからざるなり。もし弛緩すれば、則ち操、必ず之を図るなり。<sup>20)</sup>」

『三国演義』は次のように描いている。

今漢祚日危、曹操終必篡窃。南荆之地、操所必争也。劉表無遠慮、其兒子又愚劣、不能承業伝基。明公宜蚤（発音同早（sao）、早字の通假字）図之、不可後於操；若遲、則操先図之矣。

今、漢祚は日に危く、曹操、ついに必ず篡窃をなさん。南荆の地、操の必争する所なり。劉表、遠慮なし。その兒子、また愚劣なり。能く業を承け基を伝ふる者にあらざるなり。明公、当に蚤くこれを図るべし。操に後れるべからざるなり。若し恐れれば、則ち操、これを図るなり。<sup>21)</sup>」

以上の内容は、正史にも記録されている。次のようである。

今漢祚日危、曹操弥驕、終為篡盜。南荆之地、山陵形便、江川流通、誠是国之西勢也。寧已觀劉表、慮既不遠。兒子又劣、非能承業伝基者也。至尊当早圖之、不可後於操；若弛緩、則操必圖之矣。

今、漢祚は日に危く、曹操いよいよ驕りて、ついに篡盜をなさん。南荆の地は、山陵、形便にして、江川、流通なり。誠にこれ国の西勢なり。寧、已に劉表を觀て、既に遠からざるを慮う。兒子、また劣なり。能く業を承け基を伝ふる者にあらざるなり。至尊、当に早くこれを図るべし。操に後るべからざるなり。もし弛緩すれば、則ち操、必ず之を圖るなり。<sup>(2)</sup>

比較すれば、『三国志通俗演義』の方は、ほぼ書の記録と一致しているのに対して、『三国演义』の方は、文章表現が精鍊され、読みやすくなる。

この甘寧の時代分析は、孔明が劉備に初めて会った時に語った「先取荊州興帝業、後西蜀建皇都（先に荊州を取りて、帝業を興し、後に西蜀に皇都を建つ）」という時代分析と重なっている。ここに、草廬に隱居しながら、常に天下の情勢を把握して出世の機をねらっている孔明に、甘寧の姿が重なってみえてくる。

甘寧が悪行を止め、足を洗った時期は、二〇八年頃、赤壁の戦いの直前であった。時代の流れは宦官が支配した時代から群雄割拠の乱世を経て勝ち抜いた大きな勢力が天下統一を目指して対決する方向へ趣いている。

時を待っている甘寧は、今こそ、出世の機だと思つたであろう。彼は、八〇〇人の配下とともに、荊州の劉表の元に身を寄せた。荊州という地を選んだのは、彼の情勢判断によるものであるが、劉表を選んだところに、甘寧の

正統派の本流に乗ろうとする望みも窺える。しかし、二〇年にわたる江賊の経歴を持つ甘寧は、もはや「正統」に受け入れられたい存在であった。劉表は皇族で、インテリ好みの正統派であった。(当時の荊州は戦火を逃れる知識人たちが集まっており、劉表はそのスポンサー役を担っていた。)彼は江賊上がりの甘寧を軽視し、任用しなかった。一方、甘寧も劉表を見限った。やがて、甘寧は江夏太守黄祖の配下になったが、黄祖もまた「黄祖曰、寧是劫江之賊、不可重用」(黄祖曰く、寧、これ劫江の賊なり、重用すべからず<sup>23</sup>)<sup>23</sup>)という理由で、甘寧を重用せず、並の食客程度の待遇で、大きな手柄を立てても、その待遇は変えることはなかった。

甘寧は最後の希望を江東の孫権に託し、呉にたどり着いた。孫権は彼の能力を認め、旧臣と同等の待遇を与えた。甘寧はこれを明主との出会いとして、深く重く受け止め、生涯、孫権に忠誠をつくし、孫権の天下統一を果たすために、全身心を捧げた。

呉の集団に入った甘寧は魚が水を得たごとく優れた素質(忠義・勇敢・知力・統率力・武術など)を発揮する機会を得て、目を見張る功績を挙げる。二〇八年、孫権の父孫堅を射殺した黄祖を征伐する際に、甘寧は弓で黄祖を射殺し、その首を孫権に献じた。父孫堅の死から十六年後、甘寧のおかげで、孫権はようやく復讐の宿願を果たした。これは甘寧が新しい主に貢献した第一功である。その後、甘寧は歴史の表舞台で活躍をつづけた。彼はいつも先鋒を務め、戦闘の最前線に立ちつづけ、集団の中での存在感がますます大きくなっていった。中で特筆すべきことは合肥・濡須口の戦いでの活躍ぶりである。

濡須口は九江郡合肥にある巢湖の南岸に位置している。この巢湖は長江支流の一つから突き出たような位置に存

在して、湖と長江を繋ぐ支流は濡須水と呼ばれており、その濡須水の河口部を濡須口と呼んでいる。孫権勢力にとって濡須口は、曹操勢力と対峙する最前線に位置しており、呉の国防の最大の拠点であった。また、同じ巢湖の北岸には魏の重要拠点である合肥城があり、曹操にとって、合肥城は魏の国防の一大拠点でもある。そのため、長江と淮河の間に位置している合肥・濡須口一帯を巡って曹操と孫権の間で繰り返し戦いが行われていた。

二一五年孫権は自ら十萬の大軍を率いて濡須口を拠点に合肥に侵攻した。一か月余りにわたる戦いは勝敗がつかずに撤退したが、この戦いの中で、張遼と甘寧の活躍ぶりが対称的に描かれている。第一百三十四回「張遼大戦道遙津」と第一百三十五回「甘寧百騎劫曹營」という二人を特筆したこの二回（章）のタイトルは見開きになっている。第一百三十四回で張遼はわずか八百人の決死隊を引き連れ、先陣を切って、孫権の十萬の大軍を蹴散らした。この出来事は、張遼の名を呉に広く轟かせた。『三国志通俗演義』に次のように描いている。

這一陣殺得江南小兒皆怕、聞張遼大名不敢夜啼。有詩曰。

唬殺江南衆小兒、張遼名字透深闔。

纔聞乳母低声説、夜静更闌不敢啼。《蒙求》有「張遼止啼」

この一陣に、江南の小兒みな怖るることをすっかり得て、張遼の大名を聞きて、敢えて夜啼せず。詩ありて曰く。

江南の衆くの小兒を唬殺し、張遼の名字、深闔に透る。



纔に乳母の低声に説くを聞き、夜の静けさ更に闌にして敢えて啼せず。<sup>(24)</sup>『蒙求』に「張遼止啼」がある<sup>(25)</sup>。『三国演義』は次のように描いている。

這一陣殺得江南人人害怕、聞張遼大名、小兒也不敢夜啼。

この一陣に、江南の人々の害怕することをすっかり得て、張遼の大名を聞きて、小兒も敢えて夜啼せず。<sup>(26)</sup>

ここで、『三国志通俗演義』の中での詩は省略されている。物語として読みやすくなるが、ダイナミックな感覚も弱くなるようである。

この部分の内容は史書に基づくものである。史書には次のように記録されている。

遼被甲持戟、先登陷陳、殺數十人、斬二將。大呼自名、衝壘入、至權麾下。權大驚、衆不知所為、走登高冢、以長戟自守。(中略) 自旦戰至日中、吳人奪氣(中略) 權守合肥十餘日、城不可拔、乃引退。遼率諸軍追擊、幾復獲權。

遼、甲を被り、戟を持ち、先に陷陳に登り、数十人を殺し、二將を斬り。自名を大呼し、壘に衝き入り、權の麾下至る。權、大驚し、衆、為すところを知らず、走り高冢に登り、長戟を以て自守す。(中略) 且より戦

い日中に至る。呉人、気を奪はるる。(中略) 権、合肥を守ること、十餘日なれば、城抜く可からず、乃ち引退す。遼、諸軍を率いて追撃し、また権を獲ることを幾う。<sup>(27)</sup>

そして、第一百三十五回「甘寧百騎劫曹營」には甘寧の活躍ふりが緊張感にあふれて描かれている。孫権が合肥から濡須口に戻り、改めて進撃しようとするところ、曹操は四〇万の大軍を率いて、合肥の救援に来る。すると、甘寧は百騎だけを率いて夜討ちをかける。百本の白い鷺鳥の翎を取り寄せ、一人一人の兜に付け、味方の目印とし、曹操の本営に突入した。急襲を受けた曹操軍は急なところで敵の実数がかめず、ただ驚き慌てるばかりで、味方同士が衝突したりした。兜の鷺鳥の羽が目印となった甘寧らは縦横無尽に馬をとばし、敵陣を動き回り、手当たり次第に敵を殺しまわった。曹操軍が慌てて松明を掲げたところで、甘寧は一騎も失わずに帰陣していった。作品では次の歌で甘寧を称賛する。

鞞鼓声喧震地来、雄師到處鬼神哀。百翎直貫曹瞞塞、尽説甘寧虎将才。

鞞鼓(陣太鼓)の声喧しく地を震わし来り、雄師の到る處、鬼神も哀む。百翎、直ちに曹瞞の塞を貫きて、  
 尽く甘寧が虎将の才なりと説く。<sup>(28)</sup>

わずかな文字で描かれたこのシーンには、甘寧の文武両道に優れた武将としての特徴が凝縮されている。わずか

百人で四十万の大軍である曹操の陣営に切り込む勇敢さ、事前に、敵軍の混乱の中で自軍の統一を保つ方法を考える知略、兵士一騎も失わずに帰陣させる統率力など。まさに歌に歌われるとおりの「虎将の才」である。

この部分の描写は、『三国演義』でもほぼ同じである。

響鼓声喧震地来、呉師到處鬼神哀。百翎直貫曹家塞、尽説甘寧虎将才。 響鼓（陣太鼓）の声喧震地来、雄師到處鬼神哀。百翎直貫曹瞞塞、尽説甘寧虎将才。

響鼓の声喧しく地を震わし来り、呉師の到る處、鬼神も哀む。百翎、直ちに曹家の塞を貫きて、尽く甘寧が虎将の才なりと説く。<sup>(29)</sup>

「雄師」を「呉師」に、「曹瞞」を「曹家」という二字の変更しかない。（この変更は『三国演義』と『三国志通俗演義』の曹操観の異なりが窺えるが、その点については稿を改めて論じていきたいと思う。）

このシーンは、甘寧という星が作品舞台の空に最も輝く瞬間である。忠義・勇敢・知略・武術の良さが閃いている。

帰陣した甘寧を孫権が自ら迎えに出ると、甘寧は馬から飛び降りて拝伏した。孫権は彼を扶け起こし感慨深く言った。

孟德（曹操）有張遼、孤有興霸（甘寧）、足以相敵也。

孟德（曹操）に張遼有り、孤に興霸（甘寧）有り、以て相敵するに足るなり。<sup>(30)</sup>

史書は次のように記録している。

江表傳曰：曹公出濡須、号歩騎四十万、臨江飲馬。權率衆七萬應之。使寧領三千人為前部督。（中略）寧乃選手下健兒百余人、徑謁曹公營下、使拔鹿角、踰壘入營、斬得數十級。北軍驚駭鼓譟、举火如星、寧已還入營、作鼓吹、称万歲。（中略）「孟德（曹操）有張遼、孤有興霸（甘寧）、足相敵也」

江表傳曰：曹公、濡須に出で、歩騎四十万を号し、江に臨み、馬に飲ませり。權、衆七萬を率いて之に應ず。寧にして三千人を領せしめ、前部督領になさしむ。（中略）寧、乃ち、手下の健兒百余人を選び、徑に曹公營下に謁ぐ。鹿角を抜き、壘を踰へ營に入らしめ、斬ること数十級を得たり。北軍、驚駭し鼓譟し、火を举ぐることに星の如し。寧、已に營に還入し、鼓吹を作り、万歲を称す。（中略）權曰く。孟德（曹操）に張遼有り、孤に興霸（甘寧）有り、相敵うに足るなり。<sup>(31)</sup>

「曹操には張遼がおり、私には甘寧がいて、ちょうど釣合っておるのだ」と言っている。張遼は曹操の集團の十  
大將軍の筆頭にあげられる。『三国志通俗演義』の中で七人の主役を除けば、最も色濃く描かれる人物であり、名

脇役の中で最も敬愛される人物である。こうした張遼と並び称されている甘寧もまさに人々に尊敬され、厚遇され  
たはずである。ところが、忠義・勇敢・武術・統率力も張遼に劣らないのに、甘寧はより格下の存在であった。な  
ぜなら、甘寧には、致命的な欠陥があったからである。

#### 四 悪習と最期

「粗猛好殺（粗猛にして殺を好む）」は史書に記されている甘寧の性格の特徴の一つである。

雖粗猛好殺、然開爽有計略、輕財敬士、能厚養健兒、健兒亦樂為用命。

粗猛にして好んで殺すといえども、しかるに開爽にして計略有り。財を輕んじ士を敬い、能く厚く健兒を養  
えば、健兒もまた樂んで用命を為せり。<sup>(32)</sup>

粗暴で好んで人を殺すといわれる甘寧の性格が、生まれつきのものであるかどうか史書にも小説にもはっきり示  
されていない。それは「殺人放火」をやり放題という、二〇年にわたる江賊の生活の中で身に染み込んだ悪習だと  
考えられる。しかも、その悪習は最後まで変わることはなかった。史書に次のようなことが記されている

寧厨下兒曾有過、走投呂蒙。蒙恐寧殺之、故不即還。後寧齊礼礼蒙母、臨當與昇堂、乃出厨下兒還寧。寧許蒙不殺。斯須還船。縛置桑樹、自挽弓射殺之。

寧の厨下の兒、曾て過有り。呂蒙に走投す。蒙、寧が之を殺すことを恐れ、ゆえにただちに還さず。後に寧、礼を齊えて蒙母に礼す。當にともに昇堂に臨み、すなわち厨下の兒を出して寧に還す。寧、蒙に許して殺さず。斯ち船に還ることを須ち、桑樹に縛り置き、自ら弓を挽き之を射殺す。<sup>(83)</sup>

甘寧の料理人が過ちを犯し呂蒙の下へ逃げ込んだ。呂蒙は国の大都督で、甘寧の友人でもある。よく甘寧の性格を知っていた呂蒙は、甘寧の殺意から料理人を守ろうと、甘寧が自分の母親に挨拶した時、母親の前で、料理人を殺さないように約束させた。しかし、甘寧は呂蒙の眼を離れるやいなや、料理人を樹に縛り、自ら弓を引き射殺した。呂蒙の心遣いを踏み躪り、約束をしても殺意を抑えられずに殺人にいたる執念。わずかな言葉で、甘寧の残酷さ・理不尽さを実に克明に示している。この出来事の後、間もなく、甘寧は死んだ。

甘寧の人生の最期の出来事に、「粗猛好殺」という言葉を加えているところに、歴史学者陳寿の甘寧に対する厳しい評価が窺える。

小説には、エピソードは具体的に描かれていないし、「粗猛好殺」という言葉も使われていないが、芸術的な表現で、陳寿の人物評価を保っていると考えられる。

甘寧の最期については、『三国志通俗演義』に次のように描かれている。二百二十二年、蜀軍が呉に攻略してき

た時のことである。

蜀兵掩殺將來、呉兵大敗。那八路軍勢若泰山、殺得那呉軍屍橫遍野、血流成河。(中略)甘寧正在船中染病、聽知蜀軍大至、火急上馬時、一彪蠻兵驟至、人皆披髮跣足、或使弓弩長槍、傍牌刀斧、為首乃是胡王沙摩柯、生得面如噴血、碧眼突出、使一個鉄蒺藜骨朵、腰帶二張弓、威風抖擻。甘寧見其勢大、不敢交鋒、撥馬而走、被沙摩柯一箭射中寧項、帶箭而走、到於富池口(ふちこう)(注 現在河北省富池鎮)、坐大樹下而死。樹上群鴉數百、以繞其屍。呉王葬之、立廟祭祀。至今富池口有甘寧廟。往來客商祭祀極靈。有神鴉送客一程。乃是神人感応也。

蜀兵、掩殺して將に來りて、呉兵、大敗す。あの八路の軍勢、泰山の若ければ、殺すること、あの呉軍の屍が遍野に横わり、血が流れて河と成ることを得たり。(中略)甘寧、正に船中に染病してありて、蜀軍の大いに至ることを聴き知り、火急に馬に上るとき、一彪の蠻兵、驟かに至る。人、皆髪をなびかせ跣足し、或いは弓弩・長槍・傍牌・刀斧を使えり。首と為すもの、すなわち、これ、胡王の沙摩柯なり。うまれながら、面、血を嘔く如くして、碧眼、突出せり。一個鉄蒺藜骨朵(注 ハマビシの実形の鋭い突起を錘頭に加えた武器)を使い、腰に二張の弓を帯び、威風、抖擻せり。甘寧、その勢の大なるを見、敢えて鋒を交えず、馬を撥して走るに、沙摩柯の一箭により、寧が項に射中せられ、箭を帯びて走り、富池口(ふちこう)(注 現在河北省富池鎮)に到り、大樹の下に坐して死す。樹上の群鴉が數百、以てその屍を繞る。呉王、之を葬り、廟を立て

祭祀す。今に至り富池口に甘寧廟有り。往來の客商、祭祀すれば、極めて靈なり。神鴉有りて客を一程に送る。すなわちこれ神人の感応なり。<sup>34)</sup>

この部分の描写は、『三國演義』でほぼ同様である。

史書には甘寧の死について「寧卒、権痛惜之」<sup>35)</sup>とわずかの文字しか記されていない。この甘寧の最期の描写は、羅貫中の創作である。この創作は、作者の深い意匠が窺える。陳寿の人物評価を芸術の手法で保っていると思われる。甘寧は、弓矢の名手で、敵の矢を避けるのも自由自在である。その自在さが次の曹操軍の城を攻略する場面に描かれている。

城上矢石齊下、戰士多有傷。甘寧手執鉄鏈、冒矢石而上、朱光（曹軍の指揮官）令弓箭以射之、甘寧撥開箭林、一鏈打倒朱光。

城上より矢石、齊に下り、戰士に傷むもの多く有り。甘寧、手に鉄鏈を執り、矢石を冒して上る。朱光（曹軍の指揮官）は弓箭を以て之を射せしむ。甘寧、箭の林を撥開して、一鏈に朱光を打倒しぬ。<sup>36)</sup>（この部分の描写は、『三國演義』で全く同じである。）

城の上から一斉に箭が降り注ぎ、多くの味方が傷つけられる中、甘寧だけが矢石を冒して城の上によじ登りつづ



ける。それを見ている朱光は、彼を狙い射と命じたが、甘寧は「箭の林」を撥ね開いて、朱光を打ち倒した。わずかの文字でスピード感をもって、矢に対する甘寧の無敵さを表している。「矢石を冒して上り」、「箭の林を撥開し」というのは、甘寧ならではの技である。登場人物の中で他にも、呂布や趙雲なども並々ならぬ弓術の持ち主がいる。しかし、弓術の面では、甘寧の右に出る者はいない。なぜなら、二〇年にわたる、略奪殺人を本業として、常に揺れ動く船のうえから、人を射殺するという江賊の体験の中で磨かれた甘寧の弓術は、馬に乗り、靶を的にする訓練や陸地の戦の中で磨かれたものとは、格段に違うからである。

甘寧にかぎって、箭で殺されるはずはない。なのに、なぜ射殺されたのか。作品は、甘寧が病を押して出陣し、また、真っ向から現れた異様な軍勢に驚いて、馬首を返した瞬間に、沙摩柯が放った矢を受けてしまったという特別な条件を設定した。そこで、甘寧が射殺されることに不自然さは感じられなくなる。しかし、この偶然のように思われる甘寧の死に方は、無言のメッセージを伝えているように思われる。彼は、生涯、弓矢で数えきれないほどの人を殺した。その報いとして、彼自身も矢によって殺されたのだというように読み取れるのである。この死に方は陳寿の人物評価を踏まえたうえで、羅貫中が甘寧に下した「判決」ではないか。

甘寧の死の場面に特筆されたのは鴉である。樹上の鴉数百羽が群れになり、その屍の周りを飛び続ける場面、印象深いものである。作者自身を加えた「神鴉が客を送る」という注も、鴉に注目させる箇所である。

鴉のイメージは、読者の想像力を掻き立てるものである。古来、中国では、カラスは二重のイメージを持っている。一つは、神の使いで、神様の意志を人々に伝えるもの。もう一つは、不吉を予言するもの、死者にまつわるも

のである。

鴉たちが甘寧の屍を見守り、甘寧を祭る人々を見送る場面は、感動的ではあるが、鴉はやはり不吉な気配を感じさせる。作品に「忽聞群鴉之声、望南飛鳴去<sup>47</sup>」という鴉が群がって飛んでいくイメージで曹操の不吉な行方を予言する描写がある。

鴉のこの裏腹な二つのイメージは、甘寧の人生の光と闇を象徴的に示していると思われる。光とは、大志を抱え、勇敢で、主君、国に忠義を尽くした甘寧の人生の中で輝いていたところである。闇とは、最後まで好んで人を殺すという悪習を変えられなかった部分。

甘寧が生きた時代は各勢力が戦いあい、殺しあう時代。しかし、儒教の倫理道徳にかなう英雄と呼ばれた人物、関羽や趙雲などは、天下統一や忠義や大志といった大義名分のために戦い、そのとき、戦に関わりのない人はなるべく殺さない。しかし甘寧は違う。史書に記された「好んで殺す」という言葉を小説では使っていないが、彼のこの特徴をよく描いている。すなわち、彼は殺人という行為に快感を得るのである。それは戦乱の時代といっても、モラルを逸脱するものである。その故、鴉という鳥で、彼の人生の中の払拭できない暗い影のイメージを示しているであろう。

## 終わりに

『三国志通俗演義』という作品世界には、甘寧のみならずすべての登場人物の生き様、人間存在の眞実を見つめている冷然としたまなざしがあると思える。

甘寧は深刻な矛盾を抱えながら、大志を達成せずに、惨めな最期を迎えた。読者は彼の勇敢・忠義などに心が揺さぶられながらも、最後まで悪習を変えられないことに遺憾さを感じずにおられない。甘寧研究が今までなかったことは、このような読者に当てる感動の複雑さ、その人間像の捉えにくさにもあるのではないか。

儒教の国である中国で、いくら強くても努力しても「好んで人を殺す」人物に対して好感を持ったり、高く評価を下したりすべきではないという感覚は民族心理として定着している。そのような人物に対して、人々は無意識的にも警戒している。他の英雄と異なり、甘寧は死後、爵位を諡されなかった。息子も跡継ぎにならなかった。<sup>(38)</sup> それに對して、「張遼は剛侯と諡された。後は子の張虎が継ぎ、張虎の後はその子張統が継いだ。」張遼は剛侯と諡された。後は子の張虎が継ぎ、張虎の後はその子張統が継いだ。<sup>(39)</sup>

甘寧の悲劇性は、人間存在が否応なしに抱えている闇を見せしめていると思える。それは自分の意志が抑えがたい悪業あろう。理想を成し遂げなかったが、志は立派であった。使命を負って敢行したが現実や病には勝てなかった。ここに甘寧の悲劇性の特徴がある。

史書は甘寧の悪業の事実を明確に記し、「粗猛好殺」という言葉を加えた。一方、小説はその史実を触れず、弓の名手である甘寧が皮肉にも弓で殺され、数百羽のカラスの群れが飛ぶ不吉な情景を創作した。そのことで、読者、後世の人々に甘寧を受け入れさせるに成功したと言える。甘寧の悲劇は、自らの意志で悪を止められない人間の哀れさといえるのではないか。人々は甘寧の人生に共感することはできなくても、自分自身が引きずっている暗い影をより色濃く見え、ひそかに自らを戒めたり甘寧を哀れんだりするのではないか。そして、そんな彼がひたむきに努力したり、華々しく活躍したりした「舞台」にひそかに拍手を送っているように見える。

『三国志通俗演義』そのものは悲劇的な人間ドラマである。英雄たちはそれぞれ悲劇的な要素を帯びている。

劉備は、仁義の代表である。その仁君の風格が人々を魅了し、彼は、天才軍師を孔明、一流の武將関羽、趙雲、張飛を得て、蜀の国を建立し、草履売りの庶民から蜀皇帝の座に登ったが、義弟である関羽の非命な死によって、理性を失い、仁義心が独走して、関羽の仇を討つために、国を滅亡のふちに導いた。曹操は最も胆略と知略を持った政治家であるが、天下統一を目前にして、天才軍師孔明の登場と、自らが胆略と知略に驕り過ぎ、赤壁の戦いの失敗を招き、天下統一の絶好のチャンスを見逃してしまう。天才軍師孔明は、劉備に託された使命を背負い、「漢王朝復興」のために、無理に五度の北伐を敢行したが、国の内外の矛盾と自身の病によって、志半ばで、戦場に命を殉じた。

英雄たちは、大志の実現に向けて、生涯を賭け、その持てるすべてのエネルギーを燃焼し尽くして、奮戦したが、それぞれ、外在的な妨害や自らの人間的な弱みによって、挫折し、大志を達成しないまま、悲劇的に人生の幕を閉

じた。

つまり、理想と現実の矛盾、個人的な努力と「運命」（人間の意志が左右できない歴史・社会・自然の法則）の衝突は作品の底流に流れる主旋律である。

理想と現実の矛盾の中をものがきながら、時代の流れに飲み込まれていく英雄たちの人生の悲劇は、常により理想的な社会を目指して奮戦し、内外の限界に挫折しながら、なお、求め続けていく人類の歩みの縮図だとも思われる。正史『三国志』の歴史観を受け継いだ『三国志通俗演義』、また『三国演義』には民族や時代を超えて人々の集合的な無意識の深層から共鳴を呼び起こしている源があるのである。

甘寧の廟は歴史の変遷の中で、壊されたり修復されたりして、現代にいたる。宋代、陸游の《入蜀記》<sup>④</sup>にはこのような文がある。

富池昭勇廟、吳大帝時折衝將軍甘興霸也。興霸嘗為西陵太守、故廟食於此。

富池の昭勇の廟、吳の大帝の時、折衝將軍甘興霸なり。興霸、嘗て西陵の太守となる。ゆえに廟、ここに食なう。<sup>④</sup>

現在河北省富池鎮には甘寧公園があり、その中に甘寧の像が建てられている。豪華で大規模なものである。それは、三国志の他の人物の墓をはるかに上回る。歴史的な評価にかかわらず、人々の心の中で甘寧の存在感の大きさ

が鋭角的に映し出されているような気がする。

注

- (1) 裴松之 三二一〜四五一年 東晋末から宋にかけての人 宋の文帝の命で『三国志』の注をした。現在通行している『三国志』には、すべて裴松之の注がついている。
- (2) 羅貫中著 沈伯俊校注 『三国志通俗演義』明朝嘉靖壬午年紀元(一五二二年) 刻本影印 文』匯出版社 二〇〇七年七月
- (3) 羅貫中著 沈伯俊校注 『三国志通俗演義』明朝嘉靖壬午年紀元(一五二二年) 刻本影印 文匯出版社 二〇〇七年七月
- (4) 鄭振鐸著『中国文学研究』 古文書局 一九六一年六月
- (5) 鄭振鐸著『鄭振鐸文集』第五卷 作家出版社 一九八八年一月
- (6) 沈伯俊 譚良嘯編著 『三国演義大辞典』「研究状況」、「關於《三国演義》の版本源流」中華書店 二〇〇七年七月  
『社会科学研究叢書』編輯部『三国演義研究集』四川省社会科学院出版社 一九八三年二月
- (7) 劍鋒 「評毛綸毛宗崗修訂正的『三国演義』」『海南師專學報』一九八二年第二期
- (8) 傅隆基著『華中工学院學報』(社科版) 一九八一年第一期
- (9) 同(3)
- (10) 何満子「歴史小説在真實與虛構の間摆动(「歴史小説は真實と虚構の間に揺れ動く」)『光明日報』一九八四年三月二〇日
- (11) 沈伯俊 譚良嘯編著 『三国演義大辞典』「研究状況」、「關於《三国演義》の版本源流」中華書店 二〇〇七年七月  
『社会科学研究叢書』編輯部『三国演義研究集』四川省社会科学院出版社 一九八三年二月 国会図書館サーチ及びZi:検索
- (12) 沈伯俊 譚良嘯編著 『三国演義大辞典』「研究状況」、「關於《三国演義》の人物形象」中華書店 二〇〇七年七月

- (13) 羅貫中著 『三國志通俗演義』 明朝嘉靖壬午年紀元(一五二二年) 人民出版社一九七五年 刻本影印 羅貫中著 沈伯俊校注 『三國志通俗演義』 文匯出版社 二〇〇七年七月 (注 本論の中の『三國志通俗演義』の訓読は、筆者が施したものである。下同。)
- (14) 周祖謨校 『廣韻校本』 中華書局 二〇一七年一月 諸橋徹次著 『大漢和辭典』 大修館書店 一九六六年五月參照 『和刻本三國志』 は前者を採用しているが、筆者は後者を採用する。
- (15) 晋陳壽撰 宋裴松之注 『三國志』 吳書一二九二頁 中華書局 二〇〇六年一〇月 (注 正史『三國志』の漢文の訓読は、『和刻本三國志』を参考に筆者が施したものである。下同)
- (16) 古典研究会 『和刻本三國志』 影印本 汲書店一九七五年一〇月
- (17) 『三國演義』 三〇八頁 人民文学出版社 一九七二年三月
- (18) 坂口和澄 『正史三國 志英雄銘々傳』 潮書房光人社二〇一三年一月
- (19) 三國志人物辞典編纂室 『三國志人物辞典』 株式会社イースト・プレス 二〇〇七年一月
- (20) 同(3)
- (21) 羅貫中著 『三國演義』 二三〇頁 人民出版社一九七二年三月
- (22) 晋陳壽撰 宋裴松之注 『三國志』 吳書一二九二頁
- (23) 同(3)
- (24) 同(3) 五二一頁
- (25) 注《蒙求(もうぎゅう)》(中国、唐の児童用教科書。李瀚(りかん)の著。三卷。七四六年以前成立。堯、舜の伝説上の時代から六朝時代までの著名人の伝記、逸話を一事項ごとに四字の一句にまとめ、計五九六句を収めたもの。その中に「張遼止啼」という言葉もある。「江東小兒啼、怖之曰遼来遼来、無不止者」魏志卷一七唐李瀚著《蒙求》卷上新釈漢文大系五八 明治書院 一九七三年八月
- (26) 『三國演義』 五三七頁 人民文学出版社 一九七二年三月
- (27) 晋陳壽撰 宋裴松之注 『三國志』 「張遼伝」 五一八頁 中華書局 二〇〇六年一〇月

- (28) 同(3) 五二四頁
- (29) 『三国演義』五四五頁 人民文学出版社 一九七二年三月
- (30) 同(3)
- (31) 同(15)
- (32) 同(15)
- (33) 同(15)
- (34) 同(3) 六四二頁
- (35) 同(15)
- (36) 同(3) 『三国志通俗演義』
- (37) 同(3) 三七〇頁 『三国演義』三八二頁
- (38) 同(27) 五二〇頁
- (39) 同(22) 一一九五頁
- (40) 『入蜀記』は中国南宋の紀行文学。陸游の著。乾道六(一一七〇)年四川の地方官に任命された陸游が、故郷の紹興(浙江省)を出て揚子江をさかのぼり、家族とともに赴任した五ヵ月余の船旅を日記として記した書。
- (41) 陸游『入蜀記』東洋文庫 一九八六年一月